

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 7 月 8 日現在

機関番号：30106

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520515

研究課題名(和文) インタラクシオンを組織化する能力とその教授法に関する研究

研究課題名(英文) Study on competence in organizing interaction and teaching of it

研究代表者

柳町 智治 (Yanagimachi, Tomoharu)

北星学園大学・文学部・教授

研究者番号：60301925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主な成果として、まず、第二言語話者の相互行為能力を見ていくことの意義を「言語能力評価基準(スタンダード)」との関連において検討し、言語ポートフォリオ中の実際の言語活動を評価に取り入れることの重要性を議論した。次に、外国人留学生が日本人研究者にインタビューする場面を分析し、聞き手としての応答表現使用の問題点をとりあげ、連鎖構造や情報の質の差異に敏感に反応できることの重要性を指摘した。最後に、工学系留学生対象のビジネス日本語クラスにおける観察をもとに、留学生が「修復の連鎖」を通して対話者との間に起きた理解のズレに対応し相互理解を達成することができない要因と改善のための指導案を提示した。

研究成果の概要(英文)：Firstly, the present project discusses the issue of how we should evaluate second-language speakers' competence in organizing daily activities, with regard to recent 'Can-do statement' movements in Europe and Japan. Secondly, it argues that when learners produce reactive tokens during an interview, they should be sensitive to the talk's sequential organization and the differences in the quality of the information provided. Finally, the project examines why international students failed to initiate a 'repair sequence' to attain mutual understanding among participants and what kinds of classroom activities could be introduced to solve this communication problem.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：インタラクシオン コミュニケーション 会話 相互行為 日本語 日本語教育

1. 研究開始当初の背景

人々にとって最も重要なことは、日常における実践をどのように成し遂げていくかであり、そのためにどのようにインタラクションを組織化していったらいいかである。この問題は、母語使用場面であっても、母語でない言語を使用する場面であっても同様である。そして、言語は、それ自体として孤立して用いられているのではなく、常に実践に埋め込まれており、インタラクティブに組織化されている。この見方に立つ時、研究者が問題にすべきは、人々が発話、非言語、あるいは人工物といった環境中のリソースを使用しながらインタラクションを組織化していく様子を記述することになる。

会話は話し手一人だけでは成立しない。常に他者や会話の環境との関わりを通して実現されていく。インタラクションとは本来的にそういうものはずである。日本語を母語としない者の言語使用とその学習を考える際には、話し手と聞き手が言葉の使用を通してどのように会話に参加し行為を社会的に達成しているのか、その際、文脈中の諸リソースがどのように会話の組織化に関わっているのかということの問題としなければならない。本研究の背景となったのは以上のような視点である。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、(1) 日本語を母語としない者がインタラクションに参加しそれを社会的に組織化していく「能力」について、自然会話データを分析考察することを通して解明していく。(2) 上記(1)の「能力」に関する研究を通して得られた知見を学習者や言語教育実践者に対しどのように提示し説明したらいいのか、その具体的な方策を検討する、という2点であった。

3. 研究の方法

日本語を母語としない者の自然会話データを日常実践が行われている場所でビデオ収録し、その文字化データを分析した。分析の方法としては「会話分析 (Conversation Analysis)」の枠組みを用いた。

インタラクションを分析をする際の一つの有力な方法である会話分析は、人々によるインタラクションへの参加の様相を詳細に記述することを可能にする。この分析手法で得られた知見は、ビデオデータや文字化データと共に学習者や教育実践者に提示、紹介することで、従来のコミュニケーション観では捉え

ることのできなかった会話のインタラクティブな側面に目を向けることができるようになるという点ですぐれている。

4. 研究成果

本研究プロジェクトの主な成果は、以下に示すような3点に分類される。

(1) 第二言語話者のコミュニケーション能力を相互行為の枠組みを通して捉えることの意義 (Mori & Yanagimachi 2011、Okada & Yanagimachi 2012) を、近年普及している「言語能力評価基準 (スタンダード)」との関連において検討を行った。具体的には、欧州の「CEFR」と日本の「JF スタンダード」における能力記述文は第二言語話者の言語的産出の結果にのみ焦点化しており、こうしたスタンダードに依拠した言語能力評価の方法は、教育的あるいは制度的ツールとしての有用性をもつ一方で、人々の現実の言語活動の場面依存的で相互行為的な側面を捉えきることができない点を指摘した。

そして、第二言語話者の言語能力を評価する際には、実際のインタラクションの過程に目を向け、そこで観察される言語活動への参加を調整する能力を記述することが不可欠であることを示し、言語ポートフォリオによる評価の重要性を議論した (柳町 2014a、2014b、2013b)。ポートフォリオには学習者がどのような日常実践を目標言語の使用を通して行ったのか、それをどのように達成したのかに関する資料が含まれる。このように、能力記述文による評価と同時に、ポートフォリオ中に示される学習者の実際の言語活動の軌跡も積極的に評価に取り入れることの意義を本プロジェクトでは議論した (柳町 2014a)。

(2) 日本語を母語としない外国人留学生が授業の一環として理系大学院研究室を訪問しインタビューする場面のデータを収集分析し、聞き手としてどのような応答表現を用いているかを見ていった (柳町・山本 2012)。聞き手には、連鎖上の適切な位置で適切な応答をすることを通して、それが連鎖上のどの位置にある説明なのかに対する理解を表示することが求められる。さらには、サブ的な情報と本来のメインの情報といった個々の情報間の質の違いや情報の濃淡に注意を向け、それを応答表現の使い分けによって話し手に示す必要がある。しかし、以上の点は日本語を母語としない留学生には一般的には困難と思われる。

これまで、聞き手の理解応答の指導は、文

字化データ上で話し手、聞き手の発話の2行で示されるような、局所的な問題として扱われる傾向があった。ところが実際には、話し手の説明はもっと大きな連鎖の構造や情報の質の差異に敏感な聞き手の反応に支えられる形で展開されている。本研究では、教育的示唆として、実際の会話における応答例を学習者に対して示すことを通して、以上の点に彼らの意識を向かわせる指導を取り入れていくことを提言した。

(3) 日本語学習者が対話者と相互理解がうまく達成できない現象について検討を行うとともに、教育の現場での対応策を提示した(柳町他 2013a、柳町他 2011a、柳町他 2011b)。具体的には、工学系留学生のためのビジネス日本語クラスにおける観察をもとに、外国人留学生がプレゼン後の聴衆との質疑応答の時に聴衆からの質問やコメントが正確に聞き取れない、質問やコメントが発せられた意図や背景をつかめない、あるいは、質問コメントの内容や意図をきちんと確認できていない時でも、理解が不十分なまま回答してしまう問題を検討した。

日本語を母語としない者がこうした場面に関連して抱えている問題は、対話者との間に起きた理解のズレに対処し、十全な理解を達成するための「修復の連鎖(リペアシーケンス)」を開始、終了できないという点である。これが引き起こされる要因としては、言語教育の現場において談話レベルでの情報の提供と練習が欠如していることがまず挙げられる。また、理解の齟齬は母語話者同士の会話でも頻繁に起きているが、母語話者はそうした状況に対応しているという認識が学習者にも事実である。上記(2)で指導法として示したものと同様に、実際の会話例を文字化データと共に学習者に提示し、修復連鎖の構造と役割に彼らの意識を向かわせることが重要となってくるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

柳町智治 (2014a) 「日常実践を組織する能力とその評価」、『国語研プロジェクトレビュー』第4巻第3号、205-210、国立国語研究所、査読なし

柳町智治 (2014b) 「CEFR/JFスタンダードにおける言語ポートフォリオの意義：日常実践の相互行為分析の結果から」、『ヨーロッパ日本語教育』18、261-262、査読なし

柳町智治・長野克則・繪内正道・馬場直志 (2013a) 「外国人留学生による日本語コミュニケーションにおける問題点と改善策」、『工学教育』61(4)、1-5、査読あり

柳町智治・山本真理 (2012) 「インタビュー場面における聞き手の理解の表示：連鎖上の位置および報の質的差異との関係」、『2012日本語教育国際研究大会予稿集第1分冊』、127、査読なし

柳町智治・長野克則・繪内正道・馬場直志 (2011a) 「アジア人財資金構想・北大フロンティアプログラムにおけるビジネス日本語・日本ビジネス教育：その2「初級コース」受講生の「コミュニケーション能力」の問題点と改善策」、『工学教育研究講演会講演論文集』、652-653、査読なし

[学会発表](計 5 件)

柳町智治 (2013b) 「CEFR/JFスタンダードにおける言語ポートフォリオの意義：日常実践の相互行為分析の結果から」、第17回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、マドリッド・コンプルテンセ大学、9月6日

Okada, M. & T. Yanagimachi (2012). Embodied interactional competence: How do coparticipants accomplish intersubjective understanding? Paper presented at the 6th International Conference on Multimodality (6-ICOM), University of London, August 24, 2012.

Mori, J. & Yanagimachi, T. (2011). Joint Constructions of understanding and non-understanding: A case from a biology laboratory. Paper presented at the 10th Conference of the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (IEMCA 2011), July 11, 2011, University of Fribourg, Switzerland.

柳町智治・長野克則・繪内正道・馬場直志 (2011b) 「アジア人財資金構想・北大フロンティアプログラムにおけるビジネス日本語・日

本ビジネス教育：その2「初級コース」受講生の「コミュニケーション能力」の問題点と改善策」、工学教育研究講演会第59回年次大会、2011年9月10日、北海道大学

Yanagimachi, T. (2011c). Incriptions linking communities of practice: A study of business Japanese language and culture courses for international students in engineering. 5th Annual Ethnography Symposium. September 2, 2010, Queen Mary's University, London, UK.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

柳町 智治 (YANAGIMACHI TOMOHARU)

北星学園大学・文学部・教授

研究者番号：60301925